古文入門

木曽の最期　―　現代語訳　―

木曽左馬頭は、その日の装束として、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧を着て、鍬形を打ち付けた甲の緒を締め、いかもの造りの大太刀を腰につけ、石打ちの矢で、その日の戦で射て少しだけ射残したのを、背に高々と負って、重籐の弓を持って、名だたる木曽の鬼葦毛という馬で、極めて太くたくましいのに黄覆輪の鞍を置いて乗っていた。鐙を踏ん張って立ち上がり、大音声を上げて名乗って言うには、

「昔は（うわさに）聞いたことだろうが、木曽の冠者を、今は（目の当たり）見ているであろう、左馬頭兼伊予守、朝日の将軍源義仲であるぞ。甲斐の一条次郎と聞いた。互いにとってよい相手だぞ。義仲を討ち取って兵衛佐に見せよ。」

と言って、大声で叫んで馬を走らせる。一条次郎は、

「今名乗ったのは大将軍だぞ。逃がすなよ者ども、討ちもらすな若党よ、討ち取れ。」

と言って、（義仲勢を）大勢の中に取り囲んで、我こそ討ち取ってやろうと思って進んで来た。木曽の三百余騎は、（敵の）六千余騎の中を縦に、横に、八方に、十文字にと駆け破って、（敵の軍勢の）後ろへつっと抜け出たところ、五十騎ほどになってしまった。そこを打ち破って進んで行くうちに、土肥二郎実平が、二千余騎で敵を防ぎ止めている。それをも打ち破って（進んで）行くうちに、あちらでは四、五百騎、こちらでは二、三百騎、百四、五十騎、百騎ほどの（敵の）中を駆け破り駆け破りして行くうちに、（義仲勢は）主従五騎になってしまった。（その）五騎のうちまで巴は討たれなかった。木曽殿は、

「そなたは、早く早く、女なのだから、どこへでも（落ちて）行け。私は討ち死にしようと思うのだ。もし人手にかかるならば自害をするつもりだから、木曽殿が最後の戦に、女を連れていらっしゃっていたなどと、言われるとしたら、そんなこともよろしくないだろう。」

とおっしゃったけれども、（巴は）なおも落ちて行かなかったが、あまりに（何度も）言われ申して、

「ああ、戦うにふさわしいような敵がいてほしい。最後の戦をしてお見せ申し上げよう。」と言って（馬を）とどめている所に、武蔵の国で有名な剛力の武者、恩田八郎師重が、三十騎ほどで出て来た。巴は、その中へ駆け入って、恩田八郎に（馬を）押し並べて、むんずとつかんで引き落とし、自分が乗っている（馬の）鞍の前輪に押さえつけて、全く身動きさせずに、首をねじ切って捨ててしまった。その後、鎧甲を脱ぎ捨てて、東国の方へ落ちて行った。

（生き残りの五騎のうち）手塚太郎は討ち死にした。手塚の別当は落ちて行った。

今井四郎と義仲とが、主従二騎だけになって、（義仲が）おっしゃったことには、

「これまではなんとも思わない鎧が、今日は重くなったことだ。」（と言ったので、）今井四郎

が申したことには、

「お体もまだお疲れになってはいらっしゃいません。御馬も弱ってはおりません。どうして（僅か）一領の御着背長を重いとお思いになるはずがありましょうか。それは、お味方にご軍勢がおりませんので、気後れからそのようにお感じになるのでしょう。兼平一人だけがいるとしましても、他の武者が千騎だとお思いください。（私には）矢が七、八本残っておりますので、しばらく防ぎ矢をいたしておりましょう。あそこに見えておりますのは、粟津の松原と申します。あの松林の中で御自害なさってください。」

と言って、（馬に）鞭打ってゆくうちに、また新手の（敵の）武者が五十騎ほど出てきた。

（兼平は）「御主君はあの松原へお入りください。兼平はこの敵を防いでおりましょう。」と申し上げたところ、木曽殿がおっしゃるには、

「義仲は都でどのようにでもなるはずであったが、これまで逃れてきたのは、お前と同じ所で死のうと思うからなのだ。別々の所で討たれるよりも、同じ場所で討ち死にをもしよう。」と言って、（兼平と）馬の鼻を並べて（敵に向かって）駆け入ろうとなさるので、今井四郎は馬から飛び降り、主君の馬の口に取りついて申し上げたことには、

「弓矢取りというものは、長年常日頃どのような手柄を立てておりましても、最後のときに不覚をとってしまうと、いつまでも（お名前の）傷となるものです。お体はお疲れになっております。（後に）続く（味方の）軍勢はおりません。敵に（私との間を）押し隔てられ、取るに足らない郎等ふぜいに組み（馬から）落とされなさって、討たれておしまいになったなら、『あれほど日本国に有名でいらっしゃった木曽殿をば、誰それの郎等がお討ち取り申した。』などと（世間で）申すようなことは、残念至極でございます。まっすぐあの松原にお入りになってください。」

と申し上げたので、木曽は、

「それならば。」と言って、粟津の松原へ馬を走らせておいでになる。

今井四郎はただ一騎で、五十騎ほど（の敵）の中に駆け入って、鐙を踏ん張って（馬の鞍から）立ち上がり、大音声を上げて名乗ったことには、

「日頃は（私のことは）うわさにも聞いていることだろうが、今はその目で御覧なされよ。木曽殿の御乳母子、今井四郎兼平、当年三十三歳になり申す。そういう者がいるとは、鎌倉殿までも御存じのことでありましょうぞ。兼平を討ち取って（その首を、鎌倉殿に）お目にかけよ。」

と言って、射残した八本の矢を、（弓に）つがえては引きつがえては引き、矢継ぎ早に射る。生死のほどは分からないが、たちどころに敵を八騎射落とした。その後は、太刀を抜いて、あちら（の敵）と馳せ合い、こちらと馳せ合いして、斬って回ると、面と向かい合（って戦）う者はいない。分捕りもたくさんにしたのだった。（敵は）ひたすら、

「射殺せよ。」

と言って、中に取り囲んで、雨が降るように（矢を）射たけれども、鎧がよいので（矢は）裏まで届かず、（鎧の）透き間を射当てないので、傷も負わない。

木曽殿はただ一騎で、粟津の松原に駆け入りなさったが、正月二十一日の日暮れ時分のことであるうえに、薄氷が張ってはいるし、深田があるとも知らないで、馬をざっと乗り入れたところ、（深田に沈み込んでしまい）馬の頭も見えなくなった。（鐙で馬の腹を蹴りつけて）あおってもあおっても、（また、鞭で）打っても打っても、（馬は）動かない。今井の行方が気がかりで、（義仲が）振り仰ぎ（後ろを御覧）なさった内甲を、三浦の石田次郎為久が、追いすがりざま（弓を）引き絞って、ぴゅう、ぷつっと射止めた。深手なので、（義仲が、甲の）真っ向を馬の頭に当ててうつ伏せになられたところに、石田の郎等が二人（その場に）走り寄って、ついに木曽殿の首を取ってしまったのだった。（石田が、義仲の首を）太刀の先に貫いて高く差し上げ、大音声を上げて、

「この日頃日本国中に知れ渡っていらっしゃった木曽殿をば、三浦の石田次郎為久がお討ち申したぞ。」と（勝ち）名乗りを上げたので、今井四郎は（敵の軍勢と）戦っていたところが、これを聞いて、

「今となっては、誰をかばおうとて戦をもする必要があろうか。これを御覧ぜよ、東国の殿たちよ、（これこそ）日本一の剛の者の自害する手本ぞ。」と言って、（自分の）太刀の先を口にくわえて、馬から真っ逆さまに飛んで落ち、（自らの太刀に）差し貫かれて死んでしまった。

こうして、粟津の戦いという（華々しい）ものはなかったのであった。